

# 『英語ノート』における品詞割合と動詞の種類<sup>1</sup>

神谷昇<sup>a)</sup>・長谷川信子<sup>a)</sup>・長谷部郁子<sup>b)</sup>・町田なほみ<sup>a)</sup>  
a) 神田外語大学 b) 学習院女子高等科・筑波大学

本稿は、2011年から公立小学校で必修化される「外国語活動」の教材として文部科学省が編纂・配布した『英語ノート』を、そこに現れる語彙と表現に焦点をあてて、言語学・英語学の観点からその特徴を考察し、小学校での「外国語活動」(英語活動)で導入される文のタイプ・カタチを明らかにしようとするものである。本研究は語彙研究の1つではあるが、動詞に的を絞ることにより、語彙から構文、文の特徴を探るものであり、文法・構文研究に通じるものである。小学校の「英語活動」では、『学習指導要領』にも英語についての具体的な記述がないが、本稿での考察はそれを補うことになろう。

## 1. はじめに

文部科学省(以下、文科省)は2008年公示の『学習指導要領(小学校)』(以下『新要領』)において、2011年度から小学校高学年(5,6年生)対象に週1時間(年間35時間)の「外国語活動」(実質は「英語活動」)の必修化を決定した。小学校からの英語の必修化については、未だ賛否両論相違う部分も多いが、この公示により、日本における英語教育が(小学校での英語は「英語活動」との位置づけであるが)、正式に、

<sup>1</sup> 本稿は、長谷川他(2009)、神谷他(2009)を基に発展させたものである。言うまでもなく、本稿の誤りは筆者らの責任である。なお、本稿の調査は、神田外語大学言語科学研究センターの研究開発プログラム「脳科学と教育」(タイプII)『言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究』(研究代表者:首都大学東京 萩原裕子)の一部と日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究(C)『早期英語教育教材に見る語彙

小学校から始まることが国の教育方針として決定されたわけである。中学校からの開始が基本であった「外国語（英語）教育」が、実質的には小学校高学年からと開始時期が2年早まることになったと言えるであろう。小学校での「外国語（英語）活動」は、現行（2002年度施行）の『学習指導要領』下でも多くの小学校で「総合学習の時間」などを活用して行われてはいたが、2008年の公示により明文化された「目的」<sup>2</sup>が与えられ、その内容の前倒し実施が奨励される中、2011年度の全面実施に向け、教育現場では、急ピッチで「英語指導」体制を整えつつある<sup>3</sup>。

小学校での「外国語（英語）活動」は教科ではないため、『新要領』にも、目的やそれと関わるコミュニケーションの場（例えば、挨拶、自己紹介、買い物、道案内など）に言及した説明はあるが、中学校の英語についての指導要領の項目に示されているような語彙や文法などの「英語の知識」に関わる記述は一切ない。そうした状況下で、かつ、英語指導に関わる系統的な教育・研修を受けていない教員が大半である小学校の現場に鑑み、文科省は、2009年春に、『新要領』の「目的」に照らした内容の指針として『英語ノート』を全国の小学校に配布した。『英語ノート』は、教科書ではないため、その使用を義務づけるものではないが、無料配布されたこと、それに準拠した指導書や教材の配布、電子黒板といった機材

---

と文法の特徴：真に「英語が使える日本人」育成に向けて』（研究代表者：神谷 昇）の助成を受けて行われたものである。

<sup>2</sup> 具体的には、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」（新『学習指導要領（小学校）』第4章「外国語活動」第1「目的」より）と記されている

<sup>3</sup> 神田外語大学においても、千葉県教育委員会と連携し、2009年8月に（独）教員研修センターによる研修モデルカリキュラム開発プログラム『小学校外国語活動スタート研修：指導技術と英語運用力アップ』を茂原市内の小学校の英語担当（予定）教員約30名に5日間に渡り実施し、現場の教員の英語指導力、および英語力向上を狙って研修した。

の設置を自治体に働きかけるなどの施策を見れば、『英語ノート』の内容が、「小学校での英語活動」の標準として機能しつつあることは自明であろう。特に、これまで「小学校での英語活動」の蓄積も少なく、今後もALTや早期英語教育の専門家からの協力が多くは望めない地域や小学校においては、『英語ノート』（および、その指導資料）が果たす役割は非常に大きなものとなるだろう。また、これまで独自のカリキュラムで英語活動を推進してきた地域や小学校においても、これまでのカリキュラムや内容を『英語ノート』との関係で見直し、改訂を加えるであろうことは容易に想像がつく。さらには、『新要領（中学校）』が施行される2012年度の「英語」の実質的内容（検定教科書）に、小学校での「英語活動」の内容が反映されるであろうことは、教育の継続性の観点からも望ましいことであるが、その際、『英語ノート』の内容が関係することは必然と思われる。そうであるにもかかわらず、『英語ノート』が「英語の教材」として、どのような内容を持つかについても、また、その使用により児童が獲得するであろう「英語の力」「コミュニケーションの内容」についても、編纂サイドの文科省からは（『新要領』の提示以外は）示されていない。また、英語教育分野の研究においても、配布後1年が経過するが、体系的に考察された論考は筆者等の知る限りほとんどないと思われる。<sup>4</sup>

---

<sup>4</sup> 『英語ノート』は、2009年度の全国の公立小学校への無料配布の1年前にその試作版（以下「試作版」）が全国の550の拠点校に配布された。その「試作版」については、英語活動の基本的考え方、各レッスンでの具体的な導入方法、指導技術、様々な副教材など、多くの論考がなされ、様々な観点からの評価・論評も数多く提示されている。以下で、より詳しく述べるが、筆者等の観察する限り、『英語ノート』はその「試作版」と内容的にほとんど変更がないことから、こうした「試作版」にかかわる論考はそのまま『英語ノート』にも適用されると思われる。ただ、そうした論考にも、『英語ノート』（および「試作版」）に提示されている具体的な語彙や文法、文型などに言及しての調査は、筆者らの知る限りほとんどなされていない。わずかな例外が、本論文の前稿となる筆者等の研究（長谷川他(2009)、神谷他(2009)）および、同じく神田外語大学での研究（小林・森谷(2009)）である。

本稿は、このような背景を踏まえ、『英語ノート』（および「指導資料」）に提示されている「子どもが発することを期待されている英語表現と語彙」を、言語学・英語学的観点から調査した結果を報告する。『新要領』の「目的」にあるように、小学校での「外国語（英語）活動」が「英語の知識の導入」にあるのではなく、「英語に慣れ親しむ」ことにあるとしても、小学校での英語が、中学校での教科としての英語の基盤となるであろうことを考えると、『英語ノート』により、小学生の時期にどのような語彙が導入され、どんなタイプの文に触れることになるのかを、英語学や言語学（つまり、英語という言葉体系全体）の観点から明らかにすることは、中学校およびそれ以降の英語教育との連携を考える上でも、また、小学校での英語活動を効果的に支える小学校での（ALTを含む）教員や指導者を養成するにあたって重要であると思うからである。

実は、筆者等は、注4でも触れたが、上記の観点から既に、2009年配布の『英語ノート』の1年前に拠点校に配布された『英語ノート』（試作版）（以下では「試作版」）を対象に、児童が使用する語彙と表現（具体的には、「試作版」およびその「指導資料」に提示されている「扱う表現」、「CD スクリプト」、「児童の活動」）を全てデータベースとして取り込み、そこに出現する語彙を、他の児童英語関係の教材などの比較も含め、品詞の割合や文表現タイプに言及して調査し、それは、長谷川他(2009)、神谷他(2009)として公表してきた。本稿は、「試作版」以上に圧倒的な配布量で使用されており、小学校英語の標準化に大きな役割を果たすであろう『英語ノート』を、「試作版」での手法で検討した結果を報告することを第一義的な目的にしている。結論から言えば、『英語ノート』と「試作版」は、児童の語彙と表現に関する限り、多少の違い（総語数 650 語以上のなかで、『英語ノート』の方が 10 語程度少

ない) が明らかになったが、ほぼ同じであることを確認したに過ぎない<sup>5</sup>。しかし、その結論が、単なる「印象」ではなく、全表現のデータベース化、全出現語彙のレマ化、品詞分類という緻密な作業とデータの蓄積という裏付けがあることは明記しておきたい。つまり、長谷川他(2009)、神谷他(2009)で、提示した「試作版」の特徴と考察は、そのまま、『英語ノート』の特徴であり考察として有用なのである。

以下では、第2節で、『英語ノート』と「試作版」とを比較した結果を具体的に報告する。その上で第3節では『英語ノート』に出現する語彙のうち文や表現の核となる動詞に焦点を当て、どのような特性をもった動詞が導入されているのかを言語学・英語学の観点から考察する。長谷川他(2009)、神谷他(2009)でも、『英語ノート』の動詞について考察しているが、ここでは、Vendler(1967)による「意味・概念タイプ」の観点から動詞を分類して論じた。それは、言語学・英語学研究の分野の研究者には興味深い事実の提示となったが、現場の小学校での英語活動での利用に供するという観点からは程遠いものであった。そこで、本稿では、『英語ノート』の動詞を、児童英語の表現の特徴の観点から考察し、動詞の意味タイプだけでなく、導入される文のタイプを視野に入れることで、小学校英語の特徴、さらには、その中学校英語との繋がりの可能性を提示したい。第4節は本稿のまとめと、今後の児童英語教育に対する示唆を述べる。

---

<sup>5</sup> 『英語ノート』とその「試作版」の最も顕著な違いは、「試作版」では、2冊のテキストを「5年生用」「6年生用」と学年を明記していたのを、『英語ノート』では、学年ではなく、どちらを先に用いるかの指針となる「1」「2」としている点である。上述したように、神谷他(2009)および本稿では、児童が使用する語彙・表現を対象としており、以下で述べるこの2つの版の違いはその部分についてのみである。概観したところ、指導者(HRT, ALT)向けの記述にも多少の違いが散見されるが、それらについては本考察の対象ではないことに留意されたい。

## 2. 『英語ノート』の語彙：「試作版」との比較

本節では、神谷他(2009)で分析の対象とした『英語ノート』(試作版)(2008年刊)とその1年後の2009年に配布された『英語ノート』(現行版)を比較・検討した結果を簡単に報告する(長谷川他(2009)も参照)。

上述したように、神谷他(2009)は、「試作版」の児童とかわる語彙と表現をデータベース化し、レマ化、品詞分類を通して、内容語を中心に出現語彙をリスト化した。その結果が以下の(表1)である。

(表1)

品詞	英語ノート(試作版) 339語
名詞	74.0%(251語)
動詞	11.2%(38語)
形容詞	8.9%(30語)
副詞	4.1%(14語)
前置詞	1.8%(6語)

(神谷他(2009; 129)表1より)

神谷他(2009)では、「試作版」の特徴を、筆者等による他の児童英語の語彙と関わる研究(町田他(2008)、長谷川・町田(2010))により得られた知見に照らして考察することを目標の1つとしていたため、他の語彙リスト(例えば『KUIS 児童語彙リスト』)と比較を行った。そのため、それらのリストでは除外されていた固有名詞(特定過ぎる)や、数詞(1~100など、リストが膨大になりすぎる)、機能語(必ず含まれる代名詞、疑問詞、冠詞など)は、(表1)においても含まれていない。

しかし、本稿はそうした他の語彙リストと『英語ノート』に出現する語彙との比較を行うことが目的ではなく、児童英語活動の表現を概観することが目的である。人名や地名、国

名などの固有名詞などは、特定過ぎる嫌いはあるが、小学校英語活動においてそれらを用いた表現は頻出することから、「名詞」においては、固有名詞も含めて数値化することとした。また、同様に、他の語彙リストとの比較の観点から考察の対象外としていた語の組み入れを行うと、(表 2) となる。  
6, 7

(表 2)

品詞	英語ノート (試作版) 429 語
名詞	78.8% (338 語)
動詞	9.1% (39 語)
形容詞	7.2% (31 語)
副詞	3.5% (15 語)
前置詞	1.4% (6 語)

同様の方式で『英語ノート』の語彙を調査した結果、上述したように、『英語ノート』は「試作版」より数語少なくなっていることから、(表 3) となった<sup>8</sup>。

<sup>6</sup> 具体的には、(表 2) で、名詞が、固有名詞を含めたため大幅に数が増えたが、動詞、形容詞、副詞でも 1 語づつ増えている。それは、おのおの動詞で *be* (*am, is, are* は *be* と扱う)、形容詞で *OK*、副詞で *please* を加算したからである。なお、この表には冠詞、代名詞、疑問詞、や数詞(*one, two, three* など)などは含まれていない。これらを加えた総語数は、筆者等の(品詞や意味に言及した)方式によるレマ化作業の結果は、666 語であった。以下での『英語ノート』の考察には、(表 2) での算出に従って論を進める。

<sup>7</sup> 「レマ化」にあたっては、以下のような方針で行った。

- (1) 動詞の過去形を形成する *-ed* や名詞の複数形を表す *-s* はレマ化の際に削除し、基体の部分を抽出した。
- (2) 動詞の *-ing* 形については、進行形の *-ing* はレマ化の際にそれを削除し、動詞の基体を抽出する一方、動名詞の場合には *-ing* は削除せず、「名詞」として扱った。

<sup>8</sup> 2008 年の「試作版」から、2009 年の「現行版」で少なくなったのは、筆者等の数えた限りでは、動詞では (*well done*)、形容詞で *fantastic, loud, wonderful* (しかし、*right* は新たに出現) である。これは、あくまでも考察対象とした「児童の使用と関わる語彙・表現」(つまり「扱う表現」、「CD スクリプト」、「児童の活動」に表出した語彙) についての記述であり、こうした語彙が指導者の表現 (HRT と ATR と関わる部分) には表出している。

(表 3)

品詞	英語ノート（現行版） 422 語	英語ノート（試作版） 429 語
名詞	79.1% (334 語)	78.8% (338 語)
動詞	9.0% ( 38 語)	9.1% ( 39 語)
形容詞	6.9% ( 29 語)	7.2% ( 31 語)
副詞	3.6% ( 15 語)	3.5% ( 15 語)
前置詞	1.4% ( 6 語)	1.4% ( 6 語)

(表 3) から明らかなように、『英語ノート』と「試作版」では、総数においても、品詞別の割合においても、出現語彙の特徴としては大差はないと言える。すなわち、神谷他(2009)で提示した「試作版」のデータに基づく『英語ノート』の最大の特徴である「総語数に対し、動詞の数が極端に少ない」こと、「その 38 語という少数の「動詞」の大半は、他のリストにも含まれている基本的な動詞である」という観察はそのまま当てはまるのである<sup>9</sup>。

語彙研究においては、その頻度や導入時期などが話題に上がることが多く、そうした情報を基に、導入される表現や内容を考察することも可能であろう。しかし、ヒトが言語により伝達・思考する基本単位は文であること、そして、文の核となるのが「動詞」であることを考慮すると、動詞が少ないということは、導入される文のタイプが限られていることを意味する。さらに、語彙は使用する教材や扱う話題により大きく異なることが、先行研究 (Rixon 1999) でも指摘されているが、『英語ノート』で導入されている動詞の大半が、他のリストにも含まれていることから、『英語ノート』の出現動詞から文の特徴を把握することは、児童英語の特徴付けとなる可

<sup>9</sup> 詳しくは神谷他(2009)を参照されたいが、総語数に対する動詞の割合は、『KUIS 児童語彙リスト』でも 15%以上、JACET1000 で約 45%、JACET2000 で 50%以上であり、『英語ノート』の固有名詞を入れなくても 11%程度 (固有名詞を含めると 10%以下) というのは、際立って動詞が少ないことを意味しているのである。



能性が高いのである。

3. 『英語ノート』における動詞の種類：命令文を中心に  
本節では『英語ノート』における動詞の種類について調査した結果を報告する。動詞に焦点をあてて調査を行う理由は、繰り返しになるが、動詞が文の「核」であり、動詞がそれと関わる要素（主語や目的語など）の関係性を決定し、その有無や数、タイプを司り、結果として「文のカタチ（文型）」が決まるのである。例えば、以下の例文を見てみよう。

- (1) a. John *ran*.  
b. John *read* the book.  
c. John *gave* Mary a book.  
d. We *call* the dog Pochi.

(1a)では動詞 *run* が使われており、この動詞は主語のみを必要とし、いわゆる第1文型（SV）の文を形成する。これに対して(1b)の動詞 *read* は、主語の他に読む対象である目的語の「本」を要求する第3文型（SVO）の文を形成する。同様に、(1c)から動詞 *give* は物の移動・所有関係を表すが、最初の所有者としての主語 *John* から直接目的語の *a book* が間接目的語の *Mary* へと所有権が移動することを表し、そのためには3つの要素が必要であり、この文は第4文型（SVOO）を形成する。そして、(1d)では *call* は目的語の *the dog* と補語の *Pochi* を選択し、いわゆる第5文型（SVOC）の文を作るのである。こうした文型が動詞と深く関わることは、第1文型の *run* を用いて第4文型を作ることができない（つまり、\**John ran Mary a marathon.*といった文）ことから、明白である。このことは、『英語ノート』が、38語という限られた動詞しか導入していないことから、これらの動詞を考察するなら「必然的に」どういう文（文型）が導入されているか分かること

になるのである。

『英語ノート』の動詞の種類については、すでに神谷他(2009)で、「試作版」を基に動詞の種類を Vendler (1967)の観点から分類した結果を以下の(表4)を提示して報告した<sup>10</sup>。<sup>11</sup>

(表4)「試作版」の出現動詞の意味タイプ割合

動詞の意味タイプ	動詞数	%	例
活動動詞	22	51.2	help, play, run, walk
達成動詞	2	4.7	clean (他動詞), make
到達動詞	5	11.6	come, get, go, grow, turn
状態動詞	9	20.9	be, like, have, want
その他の動詞	5	11.6	meet*, thank*
計	43	100.0	

\*nice to meet you に用いられる meet や thank you の thank

(神谷他(2009;135)の(表5))

この分類は、言語学・英語学の分野では事態の概念的意味や述語に含まれるアスペクトの考察や観点から、広く受け入れられている分類であるが、教室や教育現場での英語活動への活用・応用と直接的に関わることを視野に入れたものではないため、実践的な分類であるとは言いがたい。教室活動においては、使用の場面や文型に関係する形での分類・記述の方

<sup>10</sup> 神谷他(2009)でも指摘したが、(表4)の動詞の数が(表3)より増えているのは、be動詞と see の扱いを変えているからである。(表3)では be 動詞はレマ化し、am、are、is は独立して扱わず、be の異形態とし、定型表現の See you の see も独立語の see (見る)と同じ1つの動詞として扱っている。しかし、(表4)では、実際の文タイプと例文の重要性から、それらは別の「語彙」として扱ったために、4語増えて43語となっているのである。語彙研究では、往々にして屈折辞をレマ化し「数」に焦点をあてた研究が多いが、実際の文での役割を考察すると、一律にレマ化するのではなく品詞や用法に応じて「数」も考慮することが求められることになる。語の表す「内容」を「数値化」することの難しさである。本稿で、神谷他(2009)との比較においても、また、考察の内容との関わりで「数値」に微妙な変動があるのは、そのためである。脚注6も参照のこと。

<sup>11</sup> 本稿では動詞38語と文型についての調査結果を報告することはせず、今後の課題とする。

が有用性があると思われる。

そこで、本稿では現場での「児童英語教育」に直接的に資するべく動詞の種類を調査を改めて行った。特に、教室での言語活動においては、児童が英語で活動を行う際（例えば道案内）や、教師が児童へ指示を出す際にはその多くは命令文や命令文に Please を付随させた依頼文を用いて行われることから、「命令文に使用できるか否か」の観点から分析・調査を行った。命令文の実例は(2)に示すとおりである<sup>12</sup>。

- (2) a. Look at this. (『英語ノート』2、p. 89 CD スクリプト)
- b. Be quiet! (『英語ノート』2、p. 104 CD スクリプト)
- c. Come here!

命令文となり得る事態は、教師が児童へ指示をするにあたって用いることができるばかりでなく、児童同士で指示を与え合うことや、児童自身が言語活動において動作やジェスチャーなどを使って体現することも可能である。以下の 3.1.節では、このようなことを考慮に入れて、動詞を分類した結果を報告し、3.2.節ではその応用の可能性について検討する。

### 3.1. 動詞の種類と命令文

上で述べたように実際の英語活動や指導者から児童への指示の多くは命令文で行われることが多いと考えられる。しかし、全ての動詞が命令文に使用できるわけではない。命令文は、その語用的機能から考えても、命令の受け手が、指示されたことを実現することが求められるわけであり、ヒトが自らの力でコントロールすることのできる事態を表わす動詞でなければ命令文には使えないのである。つまり、当該の動詞が命令文として成立するか否かは、その動詞の示す事態の実現に関し、ヒトが自分で「コントロールできるか否か」という意

---

<sup>12</sup> 以下で、出典が示されていない例文は全て筆者らの作例によるものである。

味的特徴と対応するのである。そこで、ここでは、動詞を以下の(3)のように大きく2つに分類する。

(3) 動詞が表わす事態

・ 動作 (～する)	run, drink, break	自分の力で
・ 移動	go, come, give	コントロール
・ be 動詞 (主に形容詞を伴い状態を表わす)		可能な事態

---

・ 変化 (～になる)	die, grow	自分の力で
・ 状態 (～である)	like, want	コントロール
・ 存在 (～にある)	there is / are	不可能な事態

自分の力でコントロール可能な事態を表わす動詞は、run などの動作を表わす動詞、go などの移動を表わす動詞、be 動詞の3種類である。例えば、「走る」「飲む」などの動作やある場所への移動、be 動詞と形容詞によって表わされるなんらかの状態 (例えば「静かにしている, be quiet」など) を保つことは自分の意思でコントロールすることが可能である<sup>13</sup>。(表5)は、この(3)の観点から『英語ノート』に含まれる動詞39語<sup>14</sup>を分類したものである。その分類の根拠となる具体例は「付録2」に提示してあるので、参照されたい。

<sup>13</sup> be 動詞の後ろに現れる形容詞によっては、\*Be tall!のように be 動詞を命令形にすることができない場合がある(文頭のアスタリスク “\*” は、その文が不適格であることを示す記号である)。「静かにしている」のような自分の力でコントロールできる一時的な状態を表す形容詞は命令文に現れることができる一方、「背が高い」のような自分の力でコントロールできない恒常的な状態を表す形容詞は命令文に現れることができない。つまり、be 動詞を用いた命令文については、be が命令文になれるか否か、ではなく、後続の形容詞の表す状態の作成・継続がコントロール可能か否かと関わるのである。本稿では、形容詞については、これ以上扱わない。

<sup>14</sup> (表5)での動詞の数は本節においては、他の子ども用リストとの比較ではないため、『英語ノート』に出現する動詞総数39語により分析を行った。ここでは、be, am, is, are を「be 動詞」という1つの形態とみなし、see が2種の意味タイプを持つゆえ異語と扱い、計39語とした。ただし、(表5)において動詞の総数が35語に減っているのは、『英語ノート』に出現する動詞39語のうち、See you や Thank you のような「定型表現」に出現する動詞4語を除外して命令文の可否を検討したためである。

(表 5) 命令文に現れることができる動詞の割合

命令文可	29 語 (82.9%)
命令文不可	6 語 (17.1%)
総数	35 語 (100.0%)

(3)の「命令文が可能か否か」の観点から分類した「付録 2」の例を(表 4)の観点から分類した「付録 1」と比較すると明らかだが、(表 4)の活動動詞(22 語)および達成動詞(2 語)は、すべて「命令文可能動詞」となる。また、(表 4)「状態動詞」は、be 動詞を除き、全て「命令文不可能動詞」である。(表 4)の分類と(3)の観点が異なるのは、「到達動詞」(移動や状態の変化に「到達点」を含意する動詞)のタイプで、そのうち「移動動詞」となるものは「命令文可能」だが、「状態変化動詞」は自らが状態変化をコントロールできないもの(例えば、grow)は「命令文不可能」となる。動詞を(表 4)とは異なる「命令文の可能性」の観点から分類することの意義が指摘できよう。

(表 4)の分類でも明らかだが(また、神谷他(2009)にて『英語ノート』に限らず児童英語一般として指摘したこともあるが)、児童英語では、be 動詞表現を除けば、「活動動詞」に属する動詞・表現が圧倒的に多いのである。「活動動詞」は全て「命令文可能動詞」となることから、(3)の観点から動詞の分類においても、「命令文可能動詞」の数は多い。命令文とならないのは、like や hope、have といった少数の「状態動詞」と自らではコントロールの及ばない grow といった「到達動詞」の一部だけである。

「命令文可能動詞」の観点から動詞を分類することは、児童英語のもう 1 つの特徴である「有生物(特に 1 人称)主語が多い」事実とも関わる。神谷他(2009)では、(表 4)の動詞分類の観点から、「試作版」に表出する「文表現」を全て洗いだし、主語が「有生物(ヒトや動物)」であるか「無生物」で

あるかにより分類し、(表6)を提示した。

(表6) 意味タイプ別動詞に対する主語別割合<sup>15, 16</sup>

動詞のタイプ	文総数	無生物主語	有生物主語
活動動詞	155	0 (0.0%)	155 (100.0%) うち1人称 98例
達成動詞	5	0 (0.0%)	5 (100.0%) うち1人称 4例
到達動詞	31	1 (1.3%)	30 (96.7%) うち1人称 29例
状態動詞 (be動詞以外)	151	0 (0.0%)	151 (100.0%) うち1人称 92例
状態動詞 (be動詞)	401	207 (51.6%)	194 (48.4%) うち1人称 151例

(表6)のデータを「命令文可能性」の観点から新たな表にすることはしないが、上述したように、「活動動詞」と「達成動詞」を用いた文は、(おそらく全て)(3)における「コントロール可能な動作」を表わす文となり「命令文可能」に分類できる。「到達動詞」は「移動」を表わす動詞なら「命令文可能」になると思われ、これら3つの動詞を用いる文の多くが「命令文可能」となる。

<sup>15</sup> 練習用単語(のみ)から成る文は分析の対象から除外した。

<sup>16</sup> 動詞の主語を算定するに当たっては以下の方針に従った。

(i) 単文の場合には動詞の主語をそのまま「主語」とみなした。

(ii) want to Vのような表現では、(以下で述べるが) want toが動詞という位置づけより canに通じるモーダル的な機能をもつ表現として扱われている思われ、「動詞」を wantではなく不定詞の動詞(Vの部分)とし、「主語」はそのVの主語(=意味上の主語)であるとみなした。

この方針に従えば、例えば以下の(ia)については単文なので状態動詞の like をこの文の動詞であるとみなし、また主語は I であると考えた。したがって、(ia)の場合には、「状態動詞の主語に1人称の主語が1回生起した」と考えた。これに対して(ib)の例では、文に want to が含まれているので、「動詞」は状態動詞の want ではなく、到達動詞の go であるとした。つまり、go の主語は意味上の主語である I であるので、「到達動詞の主語に1人称の主語が1回生起した」として算出した。

- (i) a. I like oranges.  
b. I want to go to America.

be 動詞以外の状態動詞は「命令文不可能」だが、これらの用例数は多いが、動詞は(表4)(表5)から分かるように、like や want, have などの限られた動詞が頻出するためである。また、be 動詞表現の用例も多いが、これは、物の名付け(What's this? It's a book. 『英語ノート』1、p. 108 扱う表現)や位置(I'm in the sea. 『英語ノート』2、p. 56 CD スクリプト)、状態(And your blue skirt with hearts is very cute. 『英語ノート』1、p. 72 CD スクリプト)、自己紹介、ヒトの状態や気持ちの表現(I'm fine. 『英語ノート』1、p. 24 扱う表現)などに用いられているからである。Be 動詞が命令形となり得るか否かは、注13で指摘したように、be に続く形容詞や名詞などの考察が必要で、本稿では、その考察には至っていない<sup>17</sup>。

### 3.2. 命令文可能動詞と児童英語の構文

本節では前節での調査結果を踏まえ、命令文に使用できる動詞が他の構文に使用できるかどうかを検討した。特に本稿では教室での英語活動に使用できるか否かの観点から、「want to ~」と「Let's ~」と共起できる動詞にはどのようなものがあるかを中心に検討を行った。具体例は(4)である。

- (4) a. I want to swim.  
b. Let's speak English.

この結果、基本的には命令文に使用できる動詞は「want to + 動詞」「Let's + 動詞」どちらの構文にも使用できること、また、命令文に使用できない動詞はそれらの構文にも使用できないことが判明した。具体例は(5) - (8)である。

---

<sup>17</sup> いずれにしても be 動詞構文については、「命令文の可能性」以前に、後続する形容詞や名詞、前置詞句との関係、主語のタイプなどを含め、他の一般動詞とは異なる分析・考察が必要と思われ、今後の課題としたい。

- (5) 動作を表す動詞（活動動詞）
- Speak* English.
  - I want to *speak* English.
  - Let's *speak* English.
- (6) 動作を表す動詞（達成動詞）
- Make* an omelet.
  - I want to *make* an omelet.
  - Let's *make* an omelet.
- (7) 移動を表す動詞（到達動詞）
- Go* to America.
  - I want to *go* to America.
  - Let's *go* to America.
- (8) 状態を表す動詞（状態動詞）<sup>18</sup>
- \**Like* baseball.
  - \*I want to *like* baseball.
  - \*Let's *like* baseball.

ただし、状態を表す動詞の中でも **be** 動詞については注意が必要である。注 13 でも述べたように、**be** 動詞に後続する要素が一時的な状態を表すもの（例えば *quiet*）であれば命令文が可能であり、また、**be** 動詞に後続する要素にもよるが「**want to + 動詞**」の構文にも使用できる。(9)を参照されたい。

- (9) a. **Be quiet.** (cf. \***Be tall.**)
- I want to be a teacher.
  - Let's be quiet.

以上から、基本的に、命令文に使用できる動詞であれば

<sup>18</sup> なお、(i)の例から（**be** 動詞に限らず）*have* のような状態を表わす動詞でも **want to** と共起できると思われるかもしれないが、(i)の例の *have* は「猫を手に入れて飼う」という動作の部分に主眼が置かれているものと考えら、本来の状態の *have* とは多少異なる。

(i) I want to *have* a cat.



「want to+動詞」の構文や「Let's+動詞」の構文に使用できると結論できる。『英語ノート』をはじめとした児童英語テキスト、教材では、限られた語数や構文で、可能な限り豊富な場面での活用が求められるわけであるが、「命令文」が可能ななら、「(Pleaseを付随させれば)依頼文」、「要求・希望表明文(want to文)」「勧誘文(Let's文)」といった異なった語用的機能・場面へと自動的に応用が利くわけで、こうした観点から動詞を分類することの意義は小学校英語の目的(コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度の育成やコミュニケーションの素地を養う)上からも、認識できよう。

#### 4. おわりに

上記、本稿の調査結果をまとめると、『英語ノート』に現れる動詞の多くが命令文として使用できる、動作を表わす動詞であり、有生物主語(1人称を含む)と共に現れることが明らかになった。また、こうした種類の動詞は教師から児童への教室での英語の指示表現として有用であり、児童自身が動作やジェスチャーなどを使って表出できる語彙であり、その活用範囲も広いと考えられる。本稿では、be動詞表現については考察を深めることができなかったが、中学校以降の「教科としての英語」では、必然的に文型を含む文法が導入されることから、小学校の英語活動で提示している動詞とそれを用いた表現を確認しておくことは、中学校英語へのスムーズな移行を視野にいれるなら意味あることである。

前節で、「命令文可能」な動詞が、同時に、勧誘のlet's構文、要求・希望の表明となるwant to構文にも活用できることを見た。そこでは、可能のcanとの共起については述べなかったが、同様に可能である。つまり、(5)~(8)の例に対応し、canでも同様の結果を示す。

- (10) a. I can *speak* English. 動作を表す動詞 (活動動詞)  
 b. I can *make* an omelet. 動作を表す動詞 (達成動詞)  
 c. I can *go* to America. 移動を表す動詞 (到達動詞)  
 d. \*I can *like* baseball. 状態を表す動詞 (状態動詞)

ここで、指摘しておきたいのは、こうした「命令形」となり得る動詞は、原型のまま *can* や *want to*、*Let's* を使わないで文とするには、その「使用」と「場面」において大きな制約が関わることである。(11)を(10) (および (5)~(8)) と比較されたい。

- (11) a. ?I *speak* English. 動作を表す動詞 (活動動詞)  
 b. ?I *make* an omelet. 動作を表す動詞 (達成動詞)  
 c. ?I *go* to America. 移動を表す動詞 (到達動詞)  
 d. I *like* baseball. 状態を表す動詞 (状態動詞)

*Can* を用いた(10)とは逆に、(11)は状態動詞以外はこのままでは(?で表示したように)非常に座りの悪い文である。これらを「正文」とするには、*everyday*、*every summer*などを付けて現在の習慣を表す表現としなくてはならない。つまり、動作(移動・変化)を含む動詞の現在形(原型)は、SVやSVOといった基本文型のままコミュニケーションで用いようとするなら、「現在の習慣」を表すという非常に限られた場面しか使えず、それは、小学校での英語活動に馴染む場面とは言い難いであろう<sup>19</sup>。

そうした動作(移動・変化)動詞は過去の記述にも用いられるが、そのためには、「過去形」を導入する必要がある、系統立てた文法の導入を視野に入れていない小学校の英語活動

<sup>19</sup> それでも、I study Japanese on Monday. (『英語ノート』1、8課)、I eat fruit and cereal in the morning. (『英語ノート』1、9課)といった表現が導入され「現在の習慣」を表す活動が含まれている。

では、その導入は難しい<sup>20</sup>。

しかし、前節および上記で見たように、こうした動詞も **can** や **Let's**、**want to** に後続する構文で用いるなら、原型のまま使うことができ、これらが持つ語用的機能の有用性にも助けられ、動詞を用いた文として定着を図ることができるのである。ただ、明記しておきたいのは、こうした表現において、**can** や **Let's**、**want to** は、それぞれ「可能」「勧誘」「希望」の表明と関わる「定型表現」として導入されており、文法的な分析対象とはなっていないことである。これらは、中学校以降の英語では、それぞれ、「助動詞」「使役文の命令形」「(want に続く)不定詞」として分析され、他の同様の構文との関わりで体系化される必要がある構文である。例えば、**want to** 構文は、中学校英語では通常(過去形などの導入が終了した後の)2年次に導入されることになっている。しかし、そうした体系化をせずに「定型表現」として扱うなら、これらの表現は、命令形と共に、中学校以降、大量に学ぶことになるであろう動作(移動・変化)動詞を、小学校での英語活動の中で定着させることを可能にする便利な構文である。その点からも、動詞を「命令文可能」な動詞か否かの観点から分類することは、こうした構文として使えるか否かの基準となり、教室での実際の言語活動における、英語を用いた、教師と児童の双方向のコミュニケーションを促す授業内容の考案に役立つと思われる。

「命令文可能」とは逆に、「命令文不可能」な動詞のうち、**be** 動詞を含め、**have**、**hope**、**like**、**want** といった「状態述語」

---

<sup>20</sup> それでも『英語ノート』では、教師の表現だが **Tell us about the clothes you bought.** (指導資料1 p.81) といった表現が突然出てきたりして驚かされる。また、『英語ノート指導資料』1、p.72のCDスクリプトにも **I bought it in Korea.** のように過去形が出現する。しかし、一般に、児童英語教材では、過去形は、**can** や進行形 (**be ~ing**) を用いた表現が定着してから導入されることが多く、この事実は、文型や文法の導入により英語の体

は、(11)で示したように、「原型」のまま現在の状態を表すことのできる貴重な動詞であり、児童の好みや要求、状態の記述は「自己紹介」などといった活動に欠かせない表現となる。

本稿では、『英語ノート』に出現する動詞を、言語学・英語学の知見を取り入れて分析・分類することにより、児童には「文法」を意識させなくても、中学校以降の「教科としての英語」への以降にも供する形で、英語活動を俯瞰できることを示した。体験的コミュニケーションとしての小学校での英語活動が英語の体系とどのようにつながるのか、どの程度の「英語の構造」が、そうした活動により導入されているのか、を把握することは、中学校以降の「英語の知識」を含めた英語教育へとスムーズな移行を目指すなら、欠かせない知見であろう。本稿は、『英語ノート』で導入される動詞の考察を通して、限られた範囲ではあるが、そうした視点の重要性と可能性を示したものである。

---

系を知識として導入する必要のある中学校以降の英語とは、大きく異なる点であり、小学校での英語活動が中学校での英語の「前倒し」ではないことの1つの証である。

付録 1 : 『英語ノート』 に出現する動詞

(39 語 ; アルファベット順、なお、例文の出典は『英語ノート』)<sup>21</sup>

活動動詞 (動詞数 : 22)

buy	I <i>bought</i> it in Korea.
do	Let's <i>do</i> the chant in a loud voice.
eat	I want to <i>eat</i> pizza.
fly	I can <i>fly</i> .
help	Please <i>help</i> me.
look	Grandma: <i>Look</i> at this.
play	I <i>play</i> baseball.
pull	Grandpa <i>pulls</i> the turnip.
ride	I can <i>ride</i> a unicycle very well.
run	My white horse, you can <i>run</i> fast.
say	Mama <i>says</i> , mama <i>says</i> , "Go to bed."
see	I want to <i>see</i> camels in the desert.
sing	I can <i>sing</i> my ABC.
speak	I can <i>speak</i> Japanese.
stop	Go straight and <i>stop</i> .
study	I <i>study</i> Japanese.
swim	I can <i>swim</i> .
take	I <i>take</i> a bath at 8:00.
teach	I <i>teach</i> music at school.
walk	I want to <i>walk</i> on the moon.
watch	I <i>watch</i> TV.
work	I <i>work</i> in a hospital.

<sup>21</sup> 注 14 でも述べたように、be 動詞については、人称の違いによるもの 3 つ (am, is, are) と原型 (be) の 4 つを一つの動詞と捉え、6 語とした。これらを別の述語として扱えば、状態動詞の数は 9 語となる。また、see はその意味機能に応じて「見る」の意味のものど定型表現の一部に現れるものの 2 つに分類した。このために表 3 とは異なり、動詞の数が 1 語増えている。

達成動詞（動詞数：2）

clean	I <i>clean</i> the room.
make	I can <i>make</i> an omelet.

到達動詞（動詞数：5）

come	<i>Come</i> here.
get	I <i>get</i> up at 7:00.
go	I want to <i>go</i> to Italy.
grow	I want to be doctor, when I <i>grow</i> up.
turn	<i>Turn</i> right.

状態動詞（動詞数：6 (9)）

be	am	I'm fine / happy / hungry / sleepy.
	are	How <i>are</i> you?
	is	My name <i>is</i> Ken.
	be	I want to <i>be</i> a soccer player.
have	I <i>have</i> a red cap.	
hope	I <i>hope</i> that you are, too.	
like	I <i>like</i> baseball.	
love	I <i>love</i> you, my good friend.	
want	I <i>want</i> to go to Italy.	

その他の動詞（動詞数：4）

（「その他」に含まれる動詞は以下に示すが、これらは明らかに「定型表現」の一部として表出していると思われる、意味分類の対象とはしなかった。）

let	<i>Let's</i> do the chant in a loud voice.
meet	Nice to <i>meet</i> you.
see	<i>See</i> you.
thank	<i>Thank</i> you.

## 付録 2 : 動詞の種類と命令文の可否について

3.1.節参照 (表中の『ノート』2は『英語ノート』2を表す。)

表 7 : 命令文が可能である動詞 (29 語)

動詞	例文	出典
be	Be quiet.	『ノート』2 CD スクリプト
buy	Buy this book.	筆者らの作例
clean	Clean.	『ノート』2 CD スクリプト
come	Come here.	筆者らの作例
do	Do your homework.	筆者らの作例
eat	Eat.	『ノート』2 CD スクリプト
fly	Fly higher.	筆者らの作例
get	Get up.	『ノート』2 CD スクリプト
go	Go straight.	『ノート』2 CD スクリプト
help	Help me.	筆者らの作例
look	Look at this.	『ノート』2 CD スクリプト
love	Love your mother.	筆者らの作例
make	Make a fruit salad.	筆者らの作例
play	Play baseball / the guitar.	『ノート』2 児童の活動
pull	Pull this rope.	筆者らの作例
ride	Ride on this bus.	筆者らの作例
run	Run fast.	筆者らの作例
say	Say these words.	筆者らの作例
sing	Sing this song.	筆者らの作例
speak	Speak more slowly.	筆者らの作例
stop	Stop.	『ノート』2 扱う表現
study	Study.	『ノート』2 CD スクリプト
swim	Swim.	『ノート』2 児童の活動
take	Take this book.	筆者らの作例
teach	Teach English.	筆者らの作例
turn	Turn left.	『ノート』2 CD スクリプト
walk	Walk more slowly.	筆者らの作例
watch	Watch.	『ノート2』CD スクリプト
work	Work harder.	筆者らの作例

表 8 : 命令文が不可能である動詞 (6 語)

(命令文が不可能であるために例文は提示されていない。)

動詞	備考
grow	
have	
hope	
like	
see	「会う」「見る」の意味の see
want	

注 : 以下の動詞は「定型表現」に用いられているために考察の対象としなかった。(付録 1 の「その他の動詞」も参照。)

動詞	備考
let	Let's ~の let
meet	Nice to meet you.の meet
see	See you.の see
thank	Thank you.の thank



## 参考文献

- 長谷川信子、神谷昇、町田なほみ、長谷部郁子 (2009). 「小学校英語活動における「英語のカタチ」—『英語ノート』出現語彙の分析結果から—」、第9回小学校英語教育学会(JES)東京大会(於東京学芸大学)での口頭発表、2009年7月19日.
- 長谷川信子、町田なほみ(2010)「児童英語の語彙リスト—『KUIS語彙リスト 500』の開発過程とその全容—」、*Scientific Approaches to Language* 9 (本号に収録)
- 神谷昇、長谷川信子、町田なほみ、長谷部郁子 (2009). 「『英語ノート(試作版)』の語彙の特徴—品詞と意味の観点から—」*Scientific Approaches to Language* 8, 119-145.
- 小林美代子・森谷浩士(2009)「小学校英語活動に必要な英語力とは?—『英語ノート指導資料』言語的分析からの示唆—」、『早期英語教育指導者の要請と研修に関する総合的研究』(平成20年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書)、57-80、神田外語大学.
- 町田なほみ、小林美代子、長谷川信子(2008). 「早期英語教育のための語彙リスト開発過程」*Scientific Approaches to Language* 7, 241-268.
- Rixon, S. (1999). Where Do the Words in EYL Textbooks Come From? In Rixon, S. (Ed.), *Young Learners of English: Some Research Perspectives*, pp.55-71. Essex: Pearson.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.

## 参考資料

- 『英語ノート(試作版)』5年生,6年生.(2008)文部科学省.
- 『英語ノート指導資料』5年生,6年生.(2008)文部科学省.

『英語ノート』1, 2. (2009) 文部科学省.

『英語ノート指導資料』1, 2. (2009) 文部科学省.

『小学校学習指導要領』第4章 外国語活動. (2008) 文部科学省.

『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』. (2008) 文部科学省.

(神谷)

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

*nkamiya@kanda.kuis.ac.jp*

(長谷川)

神田外語大学

大学院言語科学研究科

*hasegawa@kanda.kuis.ac.jp*

(長谷部)

162-8656

東京都新宿区戸山 3-20-1

学習院女子高等科

*ikukolcs@yahoo.co.jp*

305-8577

つくば市天王台 1-1-1

筑波大学

(町田)

神田外語大学

言語科学研究センター

*nahomijp@kanda.kuis.ac.jp*